

凶弾連鎖「偶然でない」

94年、米で息子が犠牲 福岡の砂田さん

米国に続き国内でも銃による犠牲者が出たことに、米国で息子を射殺されたことをきっかけに銃規制に取り組むNGO「ストップ・ガン・キャラバン隊」代表の砂田向亮さん(60)＝福岡市中央区＝は「非常に残念」と憤る。一方で、長崎市長銃撃事件は一般市民にも銃の危険性が迫りつつある（この表れととらえ、「日本も銃に無関心ではいけない。銃器撲滅の取り組みに本腰を入れるべきだ」と訴える。

日本でも身近に危険存在 撲滅へ本腰入れるべきだ

砂田さんは17日、米バージニア州の大学で32人が射殺された事件を受け、米国の友人の弁護士

あてに、銃規制が進まない実情を揶揄し「あなたの国は弱気だ」とメールを送った。しかし同日夜には、長崎市の伊藤一長市長が撃たれた。衝撃を

受けたが、「たんなる偶然ではない」と思った。94年、米国で働いていた長男の敬さん（当時22）が強盗目的の男に拳銃で射殺された。日本政府はただ哀れむだけで、銃規制のための支援活動は何もしてくれなかった。96年、銃の犠牲になった遺族らでキャラバン隊を発足させた。米国の団体とも連携し各地で銃規制を訴えた。99年には、自らが原告となった民事訴訟で、銃器メーカーの製造・販売責任を認めさせた。

一方の日本。各地で銃器撲滅のための講演会を開き、政府への陳情活動もした。だが運動は広がらない。銃被害を「対岸の火事」ととらえている人が多いと感じる。しかし、長崎市長射殺事件は、人通りの多いJR長崎駅前で銃弾が放たれた。一般市民が巻き添えになる危険性もあった。砂田さんは「手軽に人を殺傷できる銃がある限り、いつだれが標的にされてもおかしくない」と警告する。



砂田向亮さん。後ろは在りし日の敬さん。「息子を背負っている」との思いが活動の原動力という＝福岡市中央区

「身を守るために銃は必要」と信じる人が多い米

「今回の事件を機に、銃の危険性は日本でも身近にあるということをもっと多くの人に気付いてもらいたい」